

Title	十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(二) : 一八四八年の革命以後におけるマルクスおよびエンゲルスとイギリス労働者階級
Sub Title	British labour movement and Marxism in the 19th century (2)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.4 (1961. 4) ,p.269(19)- 284(34)
JaLC DOI	10.14991/001.19610401-0019
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610401-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610401-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (1) 拙稿「西アフリカ・マーケットテイニング・ボード下のコメ買付機構の研究」慶応義塾経済学会年報一、一九五八、一八〇頁。
- (2) F. Le Gros Clark, Henry Collins, Thomas Hodgkin, Amanke Okafor: The New West Africa, 1953, pp. 112~3.
- (3) J. S. Furnivall: Colonial Policy and Practice, A Comparative Study of Burma and Netherlands India, 1948, p. 98.
- (4) Levin; op. cit., p. 215& Andrus; op. cit., p. 182.
- (5) Andrus; op. cit., p. 183.
- (6) Levin; op. cit., p. 174.
- (7) Andrus; op. cit., p. 172.
- (8) cf. Levin; op. cit., pp. 77 ff.
- (9) Ibid., p. 184.

9

ビルマの米生産の拡張に大きな原因であった土地は、戦前にすで

(一九六一年二月十五日)

に限界に達した。クリスチャンは、一九四一年に、ビルマには今や大きな米の耕作可能地はなくなった、現在未開墾地として相当の面積をもっているのは、著名なマリア地帯である上ビルマのフーイン峽谷(Hukawng Valley)くらいだとしている。これ以上の耕地の拡張は堰堤、灌漑、排水工事が必要であり、このことは米生産の限界費用が著しく増加したことを意味する。しかし輸出経済成立の過程は、生産可能曲線上を自由に動くのとは異なり、非可逆的变化である。そして、輸出用財に対する国内の需要の所得弾力性はゼロか、(アフリカのココアのようなばあい)ゼロに近いと思われるので、農民は輸出用財を生産するか、土地を遊休させるかの選択に直面する。すなわち植民地的輸出経済構造は、植民地の地位から脱することによって払拭できる要素もあるが、政治的变化だけでは動かすことのできない面もある。独立を獲得したビルマが経済開発計画を立案し、これを実行に移したばあい、その要件は過去の歴史的産物である、このような輸出経済構造にはかならなかったのである。

(1) Christian; op. cit., p. 114. 邦訳一五五頁。

## 十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義 (二)

——一八四八年の革命以後におけるマルクスおよび  
エンゲルスとイギリス労働者階級——

飯 田 鼎

- 一、マルクス主義における時代的制約
- 二、一八四八年の革命に臨むマルクス・エンゲルスとチャーティスト運動
- 三、革命後における労働運動との背離

フリードリッヒ・エンゲルスは、一八九一年四月に書いたマルクスの「賃労働と資本」のドイツ版の序文のなかで、つぎのように述べている。

「四〇年代には、マルクスはまだ彼の経済学批判を完成していなかった。それは、五〇年代末ごろ、やっと完成したのである。それゆえ、第一分冊——『経済学批判』(一八五九年)以前にでた著作は、個々の点では、一八五九年以後に書かれた著作とことなっており、のちの著作の見地からはゆがんでいたり、まちがってさ

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義 (二)

一九 (二六九)

えいと思われ、表現や文章をふくんでいる。しかし、一般読者のために書かれたふつうの版では、著者の精神的発展のうちにくまれているこの以前の見地もさしつかえないということ、著者も一般読者もこの旧著をそのまま重刷すべきことを要求するあらゆる余地のない権利をもっているということは、自明のことである。そして、そのうちの一語でもかえようなどは、私の夢想だにしなかったところである」(傍点筆者)。

自然科学の領域においてチャールズ・ダーウィンが樹立した業績に匹敵する偉業を、マルクスとエンゲルスという二人の天才は、社会科学のためにしたのであったが、しかし彼らとて人間である限り、絶対に不可謬でありえないことはいうまでもない。マルクスやエンゲルスの片言隻句を金科玉条として考えることは、何よりもこの二人の人類解放の先駆者が忌み嫌ったことであろうし、事実、彼らの理論には、エンゲルスが指摘しているように部分的な誤謬や革

命の見とおしおよび状態分析において、欠陥があったことはもちろん、自由競争的な資本主義段階という時代的な制約から、独占資本主義段階における諸法則の把握において、必ずしも充分ではなかった。

われわれはすでに、一八四八年の革命以前におけるヨーロッパ資本主義の発展とその矛盾の激化、革命的状態の切迫という諸条件のなかで、彼らが国際的な性格を有する労働運動として、とくにチャーティスト運動について注目し、それがイギリスにおける革命的な勢力、イギリス社会革命の担い手となるであろうとして大きな希望を託するに至った過程について考察したのである。そしてそれゆえにまた、フランスにおける革命的な緊迫した諸状態について、イギリスの労働者階級にたいし、チャーティストの機関紙「ノーザン・スター」を通じて訴えたのであった。一八四七年になると、フランスの革命的な状態を伝えるエンゲルスの論文が、目立って多くなるのは、この事実を物語っている。そこでわれわれは、一八四八年の革命の勃発に際してのマルクスおよびエンゲルスの評価について考察し、とりわけ、一八四八年以後、資本主義生産様式の飛躍的発展と国際的社会主义運動の全般的な衰退のもとで、チャーティスト運動を中心とするイギリス労働者階級の運動にたいする見解を、彼らがどのようにかえるに至ったか、まずこの点からはじめることしよう。

(1) マルクス・エンゲルス選集第二巻(大月版)二六七—八頁、エンゲルス「賃労働と資本」ドイツ版序文。

## 二

マルクスとエンゲルスの著作を読んで深く感銘させられることは、刻々起りつつある政治的社会的な諸事件を洞察し、的確に把握することによってこれを理論的・法則的に解明したのみならず、いわゆる歴史的なパースペクティブの手法をもって、彼らが人間の歴史においてしめるであろう意義を、きわめて精密に予測し、しかも、もっともヴィヴィッドな筆致をもって描写したことであった。彼らの心はいまでもなく古典派経済学の批判的・階級的な世界観に立つ新しい経済学の建設に奪われながら、しかも彼らの眼は絶えず、ヨーロッパからアジアそしてアメリカ大陸に及ぶ大衆的革命的な運動に注がれており、しかも、この両者が理論と実践の統一という弁証法的な世界観に媒介され、離れがたく結びついていたことである。

思うに、一八四八年のフランス二月革命の勃発に臨みつつあった彼らの胸中には、(一)革命のうちに来るブルジョア階級の権力掌握と封建的な土地貴族の勢力の後退、これに伴って必然的に激化せざるをえないブルジョアジーと擡頭するプロレタリアートとの階級対立、(二)アイルランドやポーランド問題などに象徴的にあらわれた被圧迫民族の問題、(三)これらから当然でてくるプロレタリアートの国

際的な組織——共産主義者同盟——の問題がさしさまった当面の課題として去来していたにちがいない。これらの直面せる課題にたいして彼らがひっさげて起ち向った戦術が、必ずしも充分な効果を發揮することができず、むしろのちに、「フランスにおける階級闘争」に附したエンゲルスの序文や、「イギリスにおける労働者階級の状態」の一八九二年のドイツ版序文にみられるように、当時の客観的な諸状態にたいする不的確な把握と、その後の経済状態の変化、とくに資本主義の予期しない発展によって、プロレタリア革命の実現の可能性についての彼らの予想が裏切られ、それが遠い将来に延期されてしまったことについて、きびしい自己批判を展開しているのである。これらについてはのちにふれるとして、一八四八年におけるマルクスとエンゲルスの活動を考えるならば、やはりフランス革命についての彼らの熱烈な関心と、一八四七年以来、イギリスにおける商業恐慌の深刻化してゆく様相、そしてチャーティスト運動の復活にたいする大きな期待をみるることができるであろう。

エンゲルスは、小市民的・民主主義的な日刊新聞「ラ・レフォルム」の一八四七年一〇月二六日号に、「イギリスの商業恐慌——チャーティスト運動——アイルランド」という論文を発表しているが、そのなかには、これを示唆する一節がみられるので左にこれを引用してみよう。

「現在、イギリスが出会っている商業恐慌は、事実上、これまでのどの恐慌よりも苛烈なものである。一八三七年にも一八四二年

にも、景気後退は現在ほど全面的ではなかった。広汎なイギリス産業の全部門が、その運動の最中に停止状態に陥っている。いたるところに停滞があり、どこを見ても街頭にはおりだされた労働者ばかりである。こんな事態が、労働者のあいだにただならぬ動揺をひきおこしていることはいままでもない。彼らは、商業の繁栄の時期には企業家によって搾取され、いまでは大量に解雇され、運命のなりゆきに身をまかせている。こういうわけで、不平満々の労働者たちの集會が急激にふえている。チャーティスト労働者の機関紙『ノーザン・スター』は、大きな欄を七つ以上も使って先週の集會を報道している……」<sup>(1)</sup>

そしてとくにチャーティスト運動の指導者ジュリアン・ハーニーとオコンナーの活躍についてふれ、迫り来る大恐慌の萌しを契機として一八四二年以後、一旦衰えた運動の再燃について、「チャーティストたちは、一月のはじめから全国で行われる地方選挙のために、イギリス全土で準備をおこなっていた」ことに注目し、さらにランカシア地方に勃発した深刻な失業の労働者階級にあたえた影響について、「現在の恐慌が、大きな騒擾をひきおこし、これが政府をきわめて重要な改革に同意せざるをえなくさせるとしても、まったく驚くにはあたらないであろう」として、アイルランド人労働者の絶望的な動きと相まってイングランドはあたかも革命の到来を想わせるものがあることを印象的に説明している。

エンゲルスが、ブルジョア革命の前夜ともいべき一八四七年以

前に、この恐慌の結果としてイギリスに社会革命の可能性を信じ、その担い手としてチャーティストを期待していたことは、すでに詳細に論じたところであるが、このようなイギリスにおけるプロレタリア革命勃発にたいする楽観的ともいふべき予測は、一八四七年二月一日号の『レフォルム』に発表したエンゲルスの「チャーティストの土地綱領」にもあらわれている。一八四二年後のチャーティスト運動の一时的な崩壊以後に、オコンナーによって組織的に行われた「土地計画」(“Land Scheme”)は、一八四八年後までもつづいたいわば一種の内国殖民運動＝小農民創設運動であった。それは、オーエンの協同主義とも異なる性格のものであり、資本主義発展に逆行する反動的ともいふべき事業に墮落すべき運命の種子を宿していたのであるが、革命的条件だけを不当に評価して、チャーティストの脆弱な面を正しく認識することができなかったエンゲルスの思想を、つぎの一節は物語っている。

「いまから約二年まえ、チャーティストの労働者たちは、土地を買い取ってそれを成員に小農地として分配することを目的とする組合をつくった。この方法で、まったく新しい本質的に民主主義的な小農民階級をつくるために、工場労働者の一部を労働市場からきりはなして、工場労働者がおたがいのあいだでおこなっている過度の競争を緩和させようと期待しているわけである。ほかならぬファーガス・オコンナー自身が立案者であるこの案は、非常な成功をおさめ、チャーティスト土地組合はすでに二、三〇万

人の組合員を擁し、六万ポンド(一五〇万フラン)の組合財産をもち、『ノーザン・スター』紙に公示された組合取入が、毎週二五〇〇ポンドを上回っているほどである……。この運動が現在までつづいてきたと同じ程度でひろがりつづければ、ついには全国の土地所有権を人民が奪取するための全国的な騒擾に転化することが明らかだからである」(傍点筆者)。

エンゲルスは、やはり『ラ・レフォルム』の一八四七年一月六日号にのせた「一八四七年選挙を祝うチャーティストの宴会」には、チャーティストの精力的な指導者オコンナーと新聞「ノーザン・スター」にたいする熱烈な支持、ブルジョア急進主義の側からの攻撃からの擁護がみられるのであって、これらを一八四八年の革命以後におけるオコンナーにたいする誹謗と軽蔑の言葉と比較するならば、読む者をしてまことに隔世の感を抱かしめるに充分であり、チャーティスト運動自体の推移もさることながら、マルクスおよびエンゲルスの一八四八年の革命を境とするこの運動にたいする評価の相違を明瞭に反映しているものといえよう。

イギリスにおける革命と同時に、フランス人民の革命的情熱にたいする高い評価がみられる。たとえば、エンゲルスは、一八四七年一月二〇日号の「ノーザン・スター」にのせた「フランスの選挙法改正運動」のなかで、つぎのようにのべている。

「立ち上がれば必ず目のまえのあらゆるものを粉碎しなければならず、暴動に慣れ、喜んで革命におもむくこと酒場にゆくのに異なるとしての被圧迫民族の運動とどのように結びつけようとしていたかを示すものとして面白いと思う。まず、マルクスは、その演説のなかで、つぎのように訴える。

「現在の所有関係を廃止するということ、このことはもっぱら労働者階級の利害の関心事である。労働者階級の女がまた廃止のため的手段をもっている。ブルジョアにたいするプロレタリアートの勝利は、同時に、今日、諸国民を相互に敵視対立させている国民的・産業的紛争にたいする勝利でもある。だから、プロレタリアートのブルジョアにたいする勝利は、同時に、全被圧迫民族解放の合図でもある……」。

すべての国のうちで、イギリスこそは、プロレタリアートとブルジョアとの対立がもっともすんだ国である。だから、イギリスのプロレタリアートのイギリスのブルジョアにたいする勝利は、全被圧迫者の、その圧迫者にたいする勝利にとつて決定的である。だから、ポランドはポランドで解放されるのではなく、イギリスで解放されるのである。チャーティスト諸君は、だからして、諸民族の解放のための殊勝なれど仇な願いを表明すべきではない。諸君自身の国内の敵を撃破せよ。そうすれば諸君は、全旧社会を撃破したという誇らかな意識をもってよろしいのだ」(傍点筆者)。

資本主義のもっとも発展したイギリスにおけるチャーティスト運

ならないパリの労働者——この同じ労働者が以上のような忍耐力を示したことは、なんと巨大な進歩を証明していることか……。彼らは革命については多くを語らぬ。革命はいささかの疑いもいれぬものであり、彼らが一人残らず意見の一致している問題だからである。そしてひとたび、人民と政府との衝突が不可避となる時期がくれば、彼らは即座に街に出て、広場を集まり、舗道を寸断し、市街を横ぎって乗合馬車や荷車や客馬車をよこたえ、あらゆる露路にバリケードを築き、あらゆる小道を要塞となし、さらに一切の抵抗を排してバステューユからチュイルリ宮に進軍するであらう」。

イギリスにおけるチャーティスト運動の復活の兆候、フランスにおける革命的状态の到来にプロレタリアートの蜂起の機会が、ブルジョア階級の勝利の直後に、訪れるであろうことを確信したマルクスとエンゲルスが、この革命とポランド問題に典型的にみられた民族独立運動とを結びつけようとしたことは、彼らの演説から窺うことができるのであって、ここに、この当時すなわち、一八四八年の革命前夜における彼らのプロレタリア革命にたいする具体的な定式化、のちに共産主義の原理を經過して共産党宣言と結実すべき構想が、次第に熟しつつあったということができるのである。そこで、つぎに掲げるのは、一八四七年一月二十九日、ロンドンのポランド革命記念集会におけるマルクスとエンゲルスの演説であるが、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労働

動の勝利は、すなわち全ヨーロッパにおける革命のための序曲となり、やがて全被圧諸民族解放の狼火となるとする世界革命思想は、一八四八年の革命の前夜において、彼らを支配した革命観で、ヨーロッパにおけるブルジョア革命は、急速且つ大規模な形においてプロレタリア革命に転化するという確信にもとづいていた。エンゲルスもやはり、その演説のなかで、マルクスとはほぼ同じようなことをのべている。

「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放の端緒となるであろう最初の決定打は、イギリスのチャーティストによって開始されるであろう。私は多年イギリスにいた。そしてその間公然とチャーティストの運動に参加したものだ。ところで、イギリスのチャーティストがまさきに立ち上るであろうというわけは、まさにイギリスにおいてこそブルジョアジーとプロレタリアートの闘争がいちばん激烈だからである。」

こうした彼らの革命観が、もっとも明瞭にあらわれたのは、共産主義者同盟の綱領草案として、一八四七年一〇月下旬から一月にかけてエンゲルスによって執筆された「共産主義の原理」においてである。知られるとおり、これは二五問からなる問答形式の文書であるが、その一八問、「この革命は、どんな発展の道をたどるだろうか」にたいして、

答 それはなによりもまず、民主主義的国家制度を、そしてそれによって、直接にかあるいは間接に、プロレタリアートの政治

的支配をうちたてるであろう。イギリスのようにプロレタリアがもう人民の大多数を占めているところでは直接に、フランスやドイツのように人民の大多数がプロレタリアだけでなく小農民や小市民からなっている国では間接に。この小農民や小市民は、いまやとプロレタリアートのがわに移行しはじめ、その政治上のすべての利益も全面的にますますプロレタリアートに依存するようになり、したがって、遠からずプロレタリアートの要求に結びつくにちがいない。このためには、おそらく第二の闘争が必要であろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるほかはない。

ここにはきわめて楽観的な語調、大恐慌の一撃がありさえすれば、プロレタリアートはブルジョアジーから権力を奪取し、小農民や小市民をプロレタリアートの側にひきつけることによって、政治上のすべての権利を獲得できる絶好の機会を見出すことができるというかの如くである。しかし問題は、その革命の起り方であるが、これについては、一九問、「この革命は、ただ一国だけに単独に起るか、だろうか」とその回答はまことに示唆的である。これによれば、

答 いや、起りえない。大工業は、世界市場をつくり出して、すでに地球上のすべての人民、とりわけ文明国の人民をたがいに結びつけているので、どこの国の人民も、よその国に起こったことに依存している。さらに、大工業は、ブルジョアジーとプロレタリアートとを、すでに社会の二つの決定的な階級にし、またこ

の階級のあいだの闘争を、現在のおもな闘争にした。この点で大工業は、文明諸国における社会の発展を、すでに均等にしてしまっている。だから、共産主義革命は、けっして一国だけのものではなく、すべての文明国で、いいかえると、すくなくとも、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツで、同時に起こる革命となるであろう。この革命は、これらの国々で、どの国が他よりも発達した工業、より大きな富、また生産力により大きな量をもつかに従って、急激に、あるいは緩慢に発展するであろう。だから、この革命を遂行するのは、ドイツではもっとも緩慢でもっとも困難であり、イギリスではもっとも急激でもっとも容易だろう。それは、世界の他の国々にも同じようにいちじるしい反作用をおよぼし、それらの国々のこれまでの発展様式をまったく変えさせ、非常に促進させるだろう。それは、ひとつの世界革命であり、従って、世界的な地盤で起こるだろう。

資本主義がもっとも早くから発展している国から、よりおくれで発展した国へ、そしてさらに連鎖反応をおこして全世界を革命のルツボと化せしめるとする世界革命の思想は、一九一七年の三月革命および十一月革命というロシア革命の全過程を通じて、もっとも深刻な問題となり、ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの白熱的な争点となったロシア革命と西欧社会主義革命との関係におけるトロツキーの思想を、われわれに連想せしめるであろう。たしかにこの当時におけるマルクスとエンゲルスの革命思想は、資本主義発展にお

ける不均等の法則を充分正確に把握することができなかった結果であり、たとえば、恐慌の問題についても一八四七―八年の一時的な恐慌が、体制としての資本主義にあたる衝撃の致命的であるかどうかという面だけでしかこれを理解することができず、恐慌の程度および範囲について、多分に希望観測的な誤認があったため、資本主義が、その諸矛盾を克服して前進する能力と適応性を有していることを看過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇年代にはじまる資本主義の相対的安定期―ヴィクトリア黄金時代の到来とともに、歴史的な現実によって証明されるわけである。

要するにマルクスおよびエンゲルスは、ヨーロッパの労働者階級の運動、とくにイギリスのチャーティスト運動にたいして、世界革命の担い手、その口火を切る前衛部隊としての役割をあたえたのであった。また実際に、一八四八年の恐慌時には、チャーティスト運動は、たしかに、かつての蜂起に劣らぬほどのたくましい昂まりを示した。しかしそれにもかかわらず、革命的な蜂起にまで発展しえなかったのは、さきにのべたように、資本主義が、体制的に内包する矛盾のもっとも深刻な表現としての恐慌が、一八四八年の場合に資本主義の生存にとって致命的なものではなく、むしろその後の経済状態の変化は、資本主義の異常な繁栄をすら約束したのであった。それと同時に、チャーティスト運動内部にも運動の方針、その支持階層としてイデオロギーなどの問題について目立った変化があらわれはじめた。イギリス資本主義における相対的安定期の開始とこれ

に相応する労働者階級の運動におけるさまざまな変化、そしてそれにつづくドイツおよびフランス、アメリカ合衆国などにおける資本主義のめざましい発展、そしてその結果としておこった国際的なプロレタリアートの運動の発展は、かつてチャーティストによって口火をきられるであろうとした世界プロレタリア革命にたいするマルクスやエンゲルスの期待を、完全に裏切ったものであったが、皮肉なことに、そのような歴史的な現実が、国際的な組織としてのいわゆる第一インターナルの結成へ、彼らを方向づけたものであった。

最初に指摘したように、われわれの目的は、マルクスとエンゲルスが、マルクス主義形成の過程において、イギリス労働者階級の運動から何を学んだか、そしてまたイギリス労働者階級とその指導者は、マルクスやエンゲルスの思想をどのように理解しこれをうけいれ、もしくはこれに反撥したか、この点について究明することであった。マルクスとエンゲルスが、チャーティスト運動について、どのような評価をなし、この上もなく大きな期待をかけていたか、これについては、すでに詳論したところによって明らかであろうと思う。そこでつぎに、一八四八年以後、一八五〇年代におけるイギリスを中心とする国際的労働運動の発展を辿りながら、これらの問題に接近することにしよう。

(1) マルクス・エンゲルス全集、邦訳(大月版)第四卷三四二—三四三頁。

(2) 拙稿「十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(一)——一八四八年以前のチャーティスト運動とマルクスおよびエンゲルス」三田学会雑誌第五三卷第一二号を参照。

(3) シドニー・ポラードによれば、オーエンの協同組合建設の意図は、本来「共同社会」の建設を目的としたものであって、その後、一八四三年ロッチデールに端を発したオーエンの弟子たちによる「買物に依じて利子を支払う」運動は、オーエン主義の最終の理想としての「共同社会」の建設からはなれて、資本主義体制内の労働者階級の利益の擁護という受動的なものに変化してしまつたことを指摘しているが(シドニー・ポラード「十九世紀の協同組合——共同社会建設から小売商へ」[Essays in Labour History, In Memory of G. H. Cole, 25 September 1889-1914 January 1959, edited by Asa Briggs and John Saville, 1960, p. 95])、オコンナーの土地計画も、社会変革の主体として、小農民の創設を企図したのではなく(もちろん、小農民が革命の担い手たることができないことは歴史的に明らかであるが)、苦汗制度・低賃金や新救貧法のもとにおける、かの無残なる慈悲としての「バステュー」からの逃避を目的としたものであったことは、チャーティスト運動を研究する者にとっては周知の事実である。

(4) 拙著「イギリス労働運動の生成」(昭和三四年有斐閣)を参照。

(5) 全集第四卷三九七頁。

- (6) 前掲書四二〇—四二二頁。
- (7) 前掲書四三〇頁。
- (8) 前掲書四三一頁。
- (9) 前掲書三九〇頁。
- (10) 前掲書三九一—三九二頁。

三

エンゲルスは、一八八五年の「ケルン共産党裁判の暴露」第三版に附した序文の冒頭に、つぎのようにのべている。

「一八五二年、ケルンの共産主義者に判決がくだるとともに、ドイツの独自の労働者運動第一期の幕がおりた。この時期については、いまではほとんどわすれられている。それでも、この時期は、一八三六年から五二年までつづき、ドイツの労働者が、外国にちらばっていったのにつれて、この運動はほとんどすべての文明諸国で演じられた。しかし、そればかりではない。こんにちの国際労働者運動は、だいたい、当時のドイツ労働者運動の直接のつづきである。後者こそは最初の国際労働者運動であって、国際労働者協会(第一インターナショナル)の指導的な役割をひきうけた人々を多くうみだした。そして、共産主義者同盟が一八四八年の共産党宣言のなかで旗じるしにかかげた理論上の原則は、こんにち欧米のプロレタリア運動全体を、国際的に結合するもっとも強力な手段となっている」。

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(二)

一八四八年の革命の失敗後、ヨーロッパにおけるプロレタリアートの革命的蜂起は、いたるところで失敗し、ブルジョアジーと封建的大地主との間に妥協が生まれ、ドイツおよびフランスのプロレタリアートの指導者は、あるいはイギリスに亡命し、あるいは革命をあきらめてアメリカ大陸に移住するというように、ヨーロッパ全体にわたって反動的な風潮が濃厚となった。エンゲルスが語っているように、共産主義者同盟の歴史は、一八三四年、パリにおいて、ドイツ人亡命者によってつくられた民主共和主義的な秘密団体から発したのであるが、一八三六年になって、この同盟のなかのもっとも急進的な、多くはプロレタリア的な分子は、この秘密同盟からわかれて新たに「正義者同盟」(Das Bund der Gerechten)をつくつた。やがて一八四七年の夏、組織を変えて、かつての秘密結社の陰謀的性格から脱して、「共産主義同盟」と改めたのであった。一八四八年の革命の失敗以後、ケルン共産党裁判事件を契機として、同盟は壊滅してしまつたが、この団体が、ヨーロッパの天地に、共産主義の種子を伝播した役割は大きかった。イギリスには、チャーティストを中心し、同盟に参加していた共産主義者、急進主義者、ポラードやイタリアなどの民族主義者からなっていた同胞民主協会が結成された。この団体が、いわゆる第一インターナショナルの先行的形態であったということはその綱領が、国際主義と革命的社會主義に彩られていたという事実から、明らかに想像することができるのであり、マルクス主義をチャーティストに媒介したアーネスト・ジョー

ンク (Ernest Jones) とジュリアン・ハーニー (Julian Harney) も、この団体によって活躍した。

一八四八年の革命以後の後期チャーティスト運動とマルクスおよびエンゲルスとの関係については、古くはロートシュタインの「チャーティストから労働主義へ」(Rothstein: From Chartistism to Labourism) 最近ではジョン・サヴィルの「アーネスト・ジョーンズチャーティスト」(Ernest Jones: Chartist, Selections from the Writings and Speeches of Ernest Jones with Introduction and Notes, by John Saville) やシヨイエンの「チャーティストの挑戦」(A. R. Schoyen: The Chartist Challenge) などの興味ある研究があるが、われわれが、ここで問題にするのは、急激に変貌する資本主義に対応するものとして後期チャーティスト運動をふくむこの当時の英国の労働運動の諸要求のなかにマルクスとエンゲルスは何を感じ、それによって、彼らの見解をどのように更め、そしてまた新たな国際的な運動への展望のための礎石とするに至ったか、この点である。

いうまでもなく、チャーティスト運動は、成年男子普通選挙権の獲得を、最終且つ最大の目標として闘ったものではあったが、これとやらんで、一八四八年当時の労働者階級の緊急の日常的な要求として、十時間法の制定と穀物法の廃止などがあげられる。後者は実はブルジョア階級の要求であって、マルクスはそれがいわゆる自由貿易主義の美名にかくれて、労働者を搾取しようとする資本家的な意図の

それは現在の制度を廃止するものではなく、また他方において、その発展を促進するものでもなかった。十時間労働法案は、この制度をもっとも極端な点、支配階級がそのあらゆる逃避手段をつかいはたしたことを知る点、また他の階級の支配、社会革命が必然的となるような時点までおしすすめないのでなく、社会をどっくの昔に現在の制度によって交代させられている状態までひきもどそうとするのである。

ここにおいてエンゲルスは、むしろ十時間法の無意味を指摘し、これを廃止するようによびかけてその効果をつぎのようについて述べているのは興味深い。

「第三に、一八四七年の十時間法の事実上の廃止は、工場主たちを駆ってきわめて猛烈な過剰生産にみちびき、その結果暴落がおこるのである。たちまち現在の制度のすべての方策とにげ道がつかいはたされるであろう。そしてかつて一七九三年および一八四八年になされたよりもさらに徹底的に社会を変革し、プロレタリアートの社会的政治的支配を急速にもたらす革命が不可避免的となるであろう。」

エンゲルスのいうところによれば、工場法の事実上の廃止は、現存の市場を超える過剰生産恐慌をひきおこし、それと同時に、商品の暴落とはげしい窮乏がおこることによって、社会革命とプロレタリアートの支配がうちたてられるモメントをつくり出すというのであって、ここには明らかに、さきに指摘したように、プロレタリア

政治的な表現であるとしてはけしく攻撃したのであったが、ともあれ、一八四八年のチャーティスト運動の一时的な昂揚とその急速な退潮を峠として、労働者階級の関心が、政治上の権利の獲得よりもこうした経済上の問題に傾いていったことは、かつて彼らを革命の尖兵として期待していたマルクスとエンゲルスを焦慮させた。彼らは十時間法案の欺瞞的性格を暴露しようとするに急な余り、プロレタリアートが階級闘争の途上にある限り、一切の部分的改革は彼らの戦闘的な意識を眠りこませるものとして拒否すべきであると考えたのである。従って十時間法案を真向から拒否することこそ、解放への道であると絶叫したのである。この意味において一八五〇年代における彼らはまだ、一八六四年、第一インターナショナルの結成時にみられたような柔軟な戦術的な態度をとることができず、やはり秘密結社時代の共産主義者同盟の影響——すなわち共産主義の原理から共産党宣言にいたる——としての公式主義・教条主義を払拭するまでには至らなかった。一八四七年、保守党政府は、十時間法案を通過させたが、これをブルジョアジーが上級法院を通じて、骨抜きにすることに成功したとき、これにたいして、エンゲルスは、一八五〇年三月号のデモクラティック・レビュー誌に、つぎのように十時間法について書いた。

「十時間法案は、それ自体としてもまた終局の方策としても決定的にあやまった処置であり、そのうちに自滅の萌芽をふくんでいゝ、拙劣であり反動的でさえある方策であった。一方において、

革命にたいする楽観的な考え方、そして改革と革命とをきりはなし、部分的な改良をもって革命を阻止するものとして徹底的に排撃する態度が、彼らの思想を決定的に支配する基本的な要素としてあらわれている。すなわち、さらにつぎのように訴えている。

「生産を日々拡大することに依存している制度において、市場をさらに拡大することが不可能となつては、工場主の優勢が、その終局にたつたことは明らかである。そしてその後はどうなるか？ 一般的破滅と混沌と自由貿易論者はいふ。社会革命とプロレタリアートの支配とわれわれはいふ。」

イギリスの労働者諸君！ 万一諸君や諸君の妻子が、あらたに日に一三時間ガラガラ音のする部屋にとじこめられることになつても、諸君は絶望してはならぬ。それはどれほどにがくと、のみほされねばならぬ盃である。諸君がそれにうちかつことがはやければはいほど、よいのである。諸君の高慢な雇主は、彼らが諸君にたいする勝利と呼ぶものの獲得によって彼ら自身の墓穴を掘っているのだということを確信せよ。十時間法の廃止は、諸君の解放期の接近を決定的にはやめるべきことである。」

エンゲルスは、十時間法が、ブルジョアジーによって、実質的に無効にさせられたという事実を、労働者階級がどのようにに理解するかという点を重視し、「それは自分がまず第一に政治権力を奪取することによって、みずから手にいれねばならないことを経験によってまなぶであろうということ、いまや彼らは、下院に多数の労働者を

おくることを可能ならしめる普通選挙権による以外には、自分の社会的地位の改善にたいするなんらの保障をもけつして、また、これを認識せねばならないこと」を認識せざるをえないし、従って、十時間法の廃止は、プロレタリア革命にとって有利な条件をつくり出したということ、力説する。これは、一八四八年の革命後、チャーティストが、次第にその勢力を失い、現実的には、プロレタリアートの政治的支配、プロレタリア革命の勃発が、一八四七年頃の緊迫した状況と異なっており、ありうべからざる現象になりつつあったにもかかわらず、やはり彼はイギリスのプロレタリアートが、社会革命の先進的な担い手であるという確信を少しもかえていないし、むしろ十時間法案の実質的な廃止は、衰えつつあるチャーティストの叫びを、労働者階級の間に復活せしめるものであると考えていたようである。そしてこの場合、何と云っても、エンゲルスの頭のなかに描かれていた革命への途は、資本主義↓自由競争↓過剰生産↓恐慌↓資本主義の崩壊↓プロレタリア革命という単純な公式である。しかも革命の到来が、プロレタリアートの主体的な組織や力の問題とはあまり関係なく、ひたすら資本主義体制のもっとも基本的な矛盾である過剰生産恐慌がおこりさえすれば、もしくは、恐慌をひきおこすような重大な要因が現われさえすれば、社会体制があたかも自壊作用をひきおこすが如く、プロレタリアートの社会的政治的解放を急速に実現する革命が不可避となるのであって、客観的条件だけが不当に強調されて、革命をひきおこす要因を社会体制の矛盾の

いっさいの競争関係が消滅する。こうして十時間問題のただひとつの解決は、資本と賃労働との対立にもとづくいっさいの問題とおなじく、プロレタリア革命のうちにある」(傍点筆者)。

一八四八年以後といえども、マルクスとエンゲルスは、チャーティスト運動に失望したわけではなかった。ヨーロッパにおける革命の失敗にもかかわらず、イギリスにおいては、社会革命の兆候が、ますますはっきりとあらわれていることを信じて疑わなかった。エンゲルスは、つぎのようにのべている。

「一八四八年四月十日のチャーティストの敗北は、もっぱら外国の政治的影響の敗北であり、その決定的排除であった。だが、イギリスの発展の強大な原動力は、大陸の政治的動揺ではなく、世界商業恐慌、各人の生存をおびやかす直接的な物質的打撃にあった。そして工業ブルジョアジーがいっさいの従来の諸階級を政権から最終的に排除しつつあるこんにちでは、彼らと工業プロレタリアートとのあいだに決定的な闘争が近づいていること、そのあらうべからざる兆候があらわれている……。したがって、工業資本家かそれとも工業労働者か、そのどちらが将来支配するかというところが唯一の問題であるここイギリス、まさにこのイギリスにおいてこそ、近代的形態における階級闘争が決定的な性格をおびるための地盤が存在するのである。そこでは、一方には工業プロレタリアートが完全な社会革命を遂行し、ついには階級対立を除き去しうるための物質的手段、生産力が見いだされる。そして、もち

激化のなかに求めたことは正しいが、その担い手として労働者階級の力の問題には、あまりにもこれを過大評価したことは事実である。このような判断の結果は、一八五〇年四月号の「新ライン評論」に掲載された「イギリスの十時間労働法案」の最後にのべられている結論となつてあらわれているのである。

「最初工場主たちが独断でやり、ついで上級法院がおこなった十時間労働法の事実上の破壊は、なによりもまず好況期を短縮し、恐慌を促進するのに役立った。だが恐慌を促進するものは、同時にイギリスの発展過程とのもっとも手近な目標、すなわち工業プロレタリアートによる工場ブルジョアジーの崩壊とを促進する……。その生産手段が販路よりも比較にならぬほど大きい拡張力をもつイギリスの工業家たちが、つぎのような点にいそぎ足でちかづいていることはあきらみかである……。

世界市場そのものの限界が、近代工業のいっさいの資力の完全な伸張にとつてせますぎるようになった瞬間、近代工業がふたたびその力の自由な活動の余地を獲得するために社会革命を必要とするにいたった瞬間—この瞬間から、労働時間の制限は、もはや反動的ではなくなり、もはや工業の障害ではなくなる。反対にそれはまったくおのずからたちあらわれる。イギリスにおけるプロレタリア革命の最初の結果は、大工業を国家すなわち支配的プロレタリアートの手に集中することであろう。そして工業の集中とともに、こんにち労働時間の規制を工業の進歩と矛盾させている

るんイギリスの条件のこのような発展、工業諸階級の利害対立のこのような激化、さらにまた支配階級にたいする被抑圧階級の最後の勝利が、外国の征服のために破壊されないこと、その強烈な性格がよめられず、そして決定的な闘争が無期限に延期されないことは、全ヨーロッパのプロレタリア党の重大な関心事である。』

一八五三年に、一八四二年あるいは一八四八年にも増して深刻な恐慌が、イギリスを襲い、その結果として、階級闘争が激化し、社会革命が到来するであろうという予測を、マルクスもまたもっていた。

一八五二年八月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」紙にのせた論文のなかで、マルクスは、つぎのようにのべている。

「歴史の必然とチャーティストとは、彼らを前方へ前方へとかりたてる。彼らは、やむをえず自分の使命をはたして、旧イギリス、すなわち過去のイギリスをうちくださなければならぬ。彼らが単独で政治的権力をにぎり、政治的権力と経済上の力が彼らの手に統合され、したがって資本にたいする闘争が、いまの政府にたいする闘争と区別できなくなる瞬間から、イギリスの社会革命ははじまるであろう……。しかし普通選挙権は、イギリスの労働者階級にとっては政治的な力を意味する。なぜならイギリスではプロレタリアが人口の大多数を占め、そこで彼らは、たとい公然とやられなかったにせよ、ながい内乱のなかで、彼らの階級状態の明白な意識をたたかいたった、そしてまた、農業地帯にさえ、もはや農民はいなくて、ただ地主、生産をする資本家(借地農業者)



と賃金労働者がいるにすぎない。だから、イギリスで普通選挙権をたたいとすることは、大陸で社会主義の名によって尊重されているどんな方策よりも、社会主義の精神がこもった成果となるであろう。」

以上引用したところによって、一八四八年以後のマルクスとエンゲルス、主としてエンゲルスが、チャーティスト運動の衰退を一面において評価しながら、他方、恐慌の勃発が、とくに十時間法の実質的な骨抜きを契機として一層促進される可能性があること、この危機を通じて、チャーティストの普通選挙権獲得の要求がはげしくなり、必ず闘いとられるということを主張している。ジュリアン・ハーニーやアーネスト・ジョーンズに大きな期待がかけられたのは、このときからであった。

しかしさきにも述べたように、一八四八年以後、イギリス資本主義は相対的安定期に入り、チャーティストを階級闘争に駆りたてた四〇年代の窮乏は、次第に労働者階級を去りつつあった。と同時に、ブルジョア急進主義者のチャーティストにたいするはたつきが次第に活潑となった。これはいわば「上からの民主主義」によって、「下からの民主主義」としてのチャーティスト運動を雲霧消せしめようとするブルジョア階級の運動であって、これについては、マルクスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」において、「新反対党創立のくだで」と題してその陰謀を暴露している。一八五三年、工業恐慌の兆候が濃厚となり、

これと前後して労働者のストライキもはげしくなり、マルクスも、「いまおこっているストライキの特徴は、それが不熟練(非工場)労働者の下層、移民の影響をいま直接うけている職人たちのあいだではじまり、それから徐々に大ブリテンの大工業中心地の工場プロレタリアートをとらえてきた点にある。反対にこれまでの労働者運動のすべての段階では、ストライキはいつも工場労働者の上層—機械工、紡績工等—からはじまり、つづいて工場大衆の下層にひろがり、そしてようやく最後に職人たちにおよんでいったのである。」とのべているように、チャーティストが、一八四八年以来、大規模に復活するかにみえ、事実、アーネスト・ジョーンズの精力的な活動にたいし、マルクスもエンゲルスも絶大な賞賛をおくっている。

だが、マルクスとエンゲルスの指導と影響をうけつつ、チャーティストの左翼を形成しつつあったハーニーやジョーンズにとっても、無視することのできないものは、次第に全国的な組織にまで発展しようとしていた職業別労働組合の動向、そのなかでも圧倒的な勢力を保持していた熟練労働者の組合としての合同機械工同盟の存在であって、その指導者としてのブルジョア急進主義者と遊離しては、何事もしえないという事実である。彼らはチャーティスト運動の革命的伝統を継承し、圧迫された不熟練の低賃金労働者によびかけることによって、急進的・社会主義的大衆政党を建設することを意図したのであったが、彼らが、一八五〇年代において実際に直

面せざるをえなかったところの現実、協同組合の急速な発展であり、労働組合主義者とブルジョア急進主義者の妥協であり、熟練労働者による政治的行動の拒否であった。しかもマルクスとエンゲルスは、この当時、まだ必ずしもこうしたイギリス資本主義の変貌を具體的に、たとえば、一八五二年の大争議以後、ニュー・モデル・ユニオンとしての合同機械工同盟が、労働界において獲得した圧倒的に優越した地位を認識するというように——把握することができなかったし、労働運動をたえず政治運動と結びつけ、革命の前提条件としか考えなかった彼らにとっては、労働組合主義を客観的に正しく評価することは困難であった。こうしてマルクス主義のイギリス労働運動からの悲劇的な背離の第一歩が彼らとチャーティスト左翼との関係においてふみ出されるのである。

チャーティスト運動の末期にあらわれたマルクスおよびエンゲルスとチャーティストの左翼との思想的な対立、戦術的な問題をめぐる感情的なもつれは、ひとつには、たとえばジュリアン・ハーニーが、マルクス主義よりも、大陸の社会主義、とくにルイ・ブランの思想に接近したこと、またアーネスト・ジョーンズの場合は、次第に勢力を増していった職業別全国的労働組合とこれと密接に結びついて運動を展開しはじめたブルジョア階級の選挙権拡張運動(一八六七年に第二次選挙法改正となって結実すべきもの)のブルジョア的・小市民的イデオロギーに対し、社会主義勢力を結集することができなかつたからであるといわれる。しかしながら、それはまた、マ

ルクスとエンゲルスが、一八四五年頃から約十年間、まさにイギリス労働運動史上からみると、チャーティストの衰退期ともいうべき時期に——といっても革命的でなかったというのではない、イデオロギーや支持階層の点で方向転換・変質・変貌をとげつつあったことをいうのだが——運動の革命的な側面だけをとくに評価し、あたかも、チャーティスト運動と裏腹の関係において、つまり、チャーティスト運動が全体としてその勢力を弱めつつあったその時期、すなわち一八四三年から四五年にかけて陶工、印刷工、ガラス工、炭坑労働者、機械工などの職業別組合が、チャーティスト運動とは逆に全国的に基礎をききつつあり、しかも五〇年代には非常に多くの職種にわたって、こうした熟練労働者の組合が牢固たる勢力をもつに至ったという事実を、正しく認識することができなかったからではないだろうか。労働組合の役割については、マルクスも「賃労働と資本」において、またエンゲルスは「イギリス労働者階級の状態」においてふれているが、ともすればその戦闘的性格だけが重視されて、一八五〇年代におけるいわゆる労働組合主義(ニュー・モデル・ユニオン)の形成にもなる労働運動内部における勢力関係の変化、従って労働運動における革命的チャーティストの後退と労働組合主義者のヘゲモニーの掌握の過程にたいする分析が不十分であり、この両者の相互交替的な現象が有機的に把握されていなかったためではなかつたであろうか。チャーティスト運動の末期は、エンゲルスが「労働者階級の状態」で熱望した「チャーティストと社会主義者の合

「同」ではなくして、むしろその背離であり、チャーティストが労働運動から遊離し、その衰退と崩壊を一層速めると同時に、全国的職業別組合が、社会主義者にとって無視することのできない勢力を獲得した時期に相当した。労働運動における労働組合主義やブルジョア急進主義の役割を、彼らが戦術的に正しく位置づけたのは、国際的なプロレタリアートの運動の再組織、第一インターナショナルの結成の過程においてであった。

われわれは以上において、マルクスとエンゲルスの著作のなかから、イギリス労働運動にかんする部分を、マルクス主義の定礎期ともいべき一八四五年から五〇年代にかけて詳細にそして忠実に読んできた。そしてそのなかで、彼らととり囲む時代の制約とその公式主義からくるいくつかの基本的な矛盾を彼らがおかざるをえなかったことを指摘した。われわれはこれを基礎にして、さらにチャーティストからインターナショナルリズムへのマルクス主義の発展の過程において、これらの諸矛盾がどのように克服されてゆくか、一八五〇年代におけるチャーティスト運動の崩壊から、第一インターナショナルまでのイギリスをふくむ国際的な労働運動から、いかに深甚な教訓をあたえられるに至ったか、これらの点について、チャーティスト左翼の思想とマルクス主義との理論的矛盾、労働組合運動とチャーティストとの対立、ブルジョア・ラディカルとチャーティストへの思想的浸透などを中心にして考察するであろう。

(1) マルクス・エンゲルス選集(大月版) 第二巻「共産主義者同

盟」四二七頁。エンゲルス「共産主義者同盟の歴史」『ケルン共産党裁判の暴露』第三版(一八八五年)序文。

(2) この点については Franz Mehring: Karl Marx, Geschichte seines Lebens, 1933. 栗原佑訳「カール・マルクスとその生涯の歴史」第一巻二〇二頁以下に詳しい。

(3) 拙稿「十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転(その一)——労働組合運動における日和見主義の発生」(三田学会雑誌第五一巻第四号所収)。

(4) マルクス・エンゲルス選集第二巻、マルクス「保護貿易、自由貿易および労働者階級についての演説」(ノーザン・スター、一八四七年十月九日号所載)。

(5) マルクス・エンゲルス選集第六巻「議院政治と国家財政」四二—四三頁、「ホイッグ内閣—十時間労働日の問題」

(6) 同上書四六頁。

(7) 同上書四七頁。

(8) 同上書「イギリスの十時間労働法案」(エンゲルス)六〇—六一頁。

(9) 同上書六五—六六頁。

(10) 同上書「イギリスの選挙—トリー党とホイッグ党」九三頁。

(11) 選集第六巻一三三頁「新反対党創立のくわだて」。

(12) 同上書「労働者のストライキ—国民憲章」(マルクス)二三—三五頁。

(13) John Saville: Ernest Jones, Chartist, 1932, pp. 47-48.

## 有業率変動の分析

——勤労者家計の労働供給構造の解明——

### 目次

- (一) 本稿の目的と問題の所在
- (二) 有業率変動に関する観測事実
- (三) 有業率と労働供給価格分布の關係
- (四) 資料の性格と家計特性による層別化
- (五) 計測結果の概要(勤労者家計、成年人員三人世帯)
- (六) 本稿の目的と問題の所在(再)

最近におけるわが国雇用構造の変動は、一方において若年労働力とくに新規学卒者の著しい求人難という現象が生起し始めたことと、他方において依然として、中小企業被雇用者、日傭、臨時工、中年女子就業者等に見られる低賃金労働者群の多数が存在するという二面的構造にその特徴を見出すことができる。前者は若年労働力層に対する労働市場の硬化(需要超過)という戦後日本経済の成長過程にはじめて現れた現象であって、これは云うまでもなく、急速

有業率変動の分析

尾崎巖

度の経済成長に伴う労働需要の拡大と、終身雇用制度がもたらす新規労働力への需要の集中とが、戦戦時の出生率の低下によるこの年齢層人口の相対的減少および進学率の増大という供給側の条件と相俟って出現したものである。かくして初任給は大幅に上昇し、また中小企業とくにサービス業においてはこの年齢層に対する著しい求人難が生じた。

さてこれらの現象が直ちにわが国労働市場の全面的変化をもたらすものとは云い難い。しかし、この新規学卒者に対する労働力不足と、初任給および若年層賃金率の上昇が今後も続くものとするれば、種々の面においてわが国就業構造の変動に将来著しい影響を与えることは十分予想される。その第一はこの年齢層に対する労働力不足がもたらす他の年齢層への労働需要の拡大効果であり、第二は初任給上昇に伴う波及効果として賃金格差変動に与える影響であり、第三はこれまでわが国特有の制度であった年功序列型賃金体系の崩壊傾向が見られてきたという現象である。上記三つの現象は何れもが